「骨格提言」の完全実現を求める１０．２３大フォーラム
つながって生き抜くぞ！コロナの社会のわたしたち
に寄せて
沖縄県自立生活センター・イルカ原稿

私たち沖縄県自立生活センター・イルカは沖縄で任意団代の頃から約30年にわたって、障害がある人が中心となって、重い障害のある人が暮らせる地域をつくるために活動してきました。
その中で変えられたこと、変わらなかったことがあります。
多くの商店では車いすの人が入れるスロープがつけられ、歩道も歩きやすくなりました。バスも今では車いすでも乗れるバスが９０％を超えています。
でも、障害がある人が出歩いている様子を見ることはまだまだ少ないです。
また、街中には障害児者の通所事業所を見かけることが多くなりました。
でも、街中で障害のある人と出会うことは少ないです。
また、教育では、早期療育、特別支援教育の充実といううたい文句のもと、特別支援学級、特別支援学校がどんどん増えています。
でも、障害のある子どもが近所の子どもたちと友達になる機会は減り続けています。
私たちの運動は、重度の障害があっても、どんどん街に出て、人と人とが出会い、ふれあい、直に語り合うことの連続が私たちインクルーシブ社会を目指す運動そのものです。
そして今回新型コロナウイルスが蔓延することで、私たちのインクルーシブ社会を目指す運動はかつてない危機に直面しているといえます。
その運動の転換を求められています。
全ての人が、新型コロナウイルスと対峙して生きる社会。その中で私たち障害者は、決して弱者ではありません。
私たちがこれまでの社会で築いてきた経験やノウハウはこれからの社会でも生かされるものです。
例えば、医療的ケアの必要な人の介助では、こまめな消毒は常に行われてきました。
コミュニケーション支援が必要な人との情報のやり取りのノウハウを有している人もいます。
しかし、新しい障壁も生まれます。マスクをすることで口話を読み取る難聴者のコミュニケーションは制限されます。文字化の技術を使っています。
社会的障壁に対峙した時に、バリアをなくすための知恵と勇気、を私たちは持っています。
これからもその実践を続けていきながら、誰もが暮らしやすい社会を目指していくために、共に歩んでいきましょう。